

## 第34回 友情のレポーター（2023）バングラデシュ取材レポート

### 落合 碧（東京都／当時 11 歳）

第34回友情のレポーターの落合碧です。  
バングラデシュであったことや感じたことを書いていきたいと思います。  
少しでも現地での様子を想像してもらえたらうれしいです。

#### バングラデシュ一日目

飛行機を乗り継ぐこと10時間以上！ついにバングラデシュに到着！  
お金の両替、荷物の受け取り、入国審査を経て空港の外に出た。道路に出ると・・・  
とても驚いた。ヘルメットなしでバイクに乗っていたり、人がトラックの上に乗っていたりする。日本では見たことがない衝撃の光景だった。さらによく見ると道路には車線も信号もない。車線がなくてこの道路は成り立つのだろうか。車と車がぶつかってしまわないだろうかと思った。信号がないのに、道路はどうやって渡るのだろうか疑問に思った。観察していると、通行人は車と車の間を縫って通っていた。バングラデシュには信号自体がそもそも少ないようだ。信号があったとしても電気が通ってなかったり、そもそも誰も見ていないので結局意味がないらしい。  
そして私が一番印象に残ったことは、クラクションの音だ。クラクションはずっと鳴りっぱなし。まるでクラクションの大合唱だ。日本ではクラクションは、危険を知らせる為に使うが、バングラデシュでは危険を知らせるためではなく、自分の存在を知らせる為に使われていた。だからみんなクラクションを鳴らしたい放題に鳴らす。夜だったのに、すごくクラクションの音がうるさいと、赤ちゃんを育てている人や、もう寝ている人にとっても迷惑ではないかなと思った。  
渋滞から、抜けたかと思うと車のスピードがどんどん上がっていく。道がちゃんと舗装されていない為、道が凸凹している。スピードが速く、更に道が凸凹しているとまるでアトラクションのようで少し楽しかった。

#### バングラデシュ二日目

今日は、スラム街に行った。  
スラム街には、想像していたよりもずっと、沢山の人が住んでいた。  
私の行ったスラム街は約8畳の部屋が270室もある大きなスラム街だ。スラム街に

は、井戸が一つしかなく共同で使っている。シャワーやトイレも共同で使っている。

井戸、トイレ、シャワーの周りは他よりも強烈な匂いがした。掃除はしているのだろうか。

今日はスラム街の中の二つの家庭を訪問してインタビューをした。

一つ目は、六人家族。

・おばあちゃん ・お父さん ・お母さん ・長女 ・長男 ・次男

お母さんは炊事、長女は学校に通っていて来年から働く。大学も行きたかったけど、経済的に難しいので働くそう。お父さんは力車（人を後ろに乗せて運ぶ自転車のような車）の仕事をしていて20000円ほどの月収だそう。

ご飯は、家の外にある共同の炊事場（屋外で料理をしようと思っていなかったのが驚いた）で料理をして、家の中で食べる。一日2食で朝はビスケットやパン、夜はお米、卵料理、ジャガイモや野菜の料理、ダル（豆）スープ、魚のすり身が定番のお母さんの料理だそう。

部屋は7畳くらいで、部屋の半分をベッドが占めている。大人3人はベッドで寝て、子どもたちのうち一人が順番でベッドで寝るので、毎日ひとつのベッドに4人が入って寝るらしい。残った子どもは床で寝ているというので驚いた。あまりに狭い。部屋の中に6人全員分の荷物が入りきっているらしい。照明は電球ひとつだけ。電気代を聞いたら、1600円ほどだそう。

将来の夢を聞いたら、娘さんは銀行員になりたいと話してくれた。

横にいたお母さんも夢を語ってくれた。子どもたちがいい仕事に就けることだそう。いい仕事があるかはその場では聞けなかったが、たぶんお給料のいい仕事という意味なのだと推測した。6人家族で20000円の月収しかないのだから、少しでもお給料のいい仕事に就いてほしいと思うのは自然なことだと思うが、仕事を選ぶ基準がお給料なのは少しむなしと思った。やりがいとか、楽しいと思えるかとか、私はそういう基準で仕事を選びたいと思っていたからだ。

次に取材した家庭は、七人家族だった。

・お父さん ・お母さん ・お兄さん ・長女の  
ビーティーさん 19歳 ・次女がスレーヤさん  
16歳 ・三女がボルーナさん 14歳 ・ビー  
ティーさんの息子がアラファットくん 10ヶ月

家は1階と2階があり、1階は約8畳だった。



ここからは、インタビューした内容について紹介します。

**Q：まだ学校には行っていますか？**

スレーヤさんとボルーナさんは、まだ学校に行っている。

ビーティーさんは、5年生になったので学校をやめた。

（学校には、行けていないのかなと想像していたので、少しの間でも学校に行っていると聞いて安心した。）

**Q：学校の時間はどのくらい？**

AM8:00～AM10:30 まで

（日本と比べるとだいぶ短いなと思った）

**Q：夏休みはあるの？**

いつもは、5月～6月が夏休み。

（今年は、デング熱の流行と12月にある選挙の為に夏休みは中止なのだそうだ）

**Q：いつも誰と遊んでいるの？**

きょうだいや、近所の人と遊んでいる。

スラム街に行って印象に残ったことは、ビーティーさんがまだ19歳なのに、もう子どもを産んで育てていると聞いたことだ。日本では、19歳で子どもを産んでいる人はすごく少ないし私は、聞いたことがないのでとてもビックリした。そして、ビーティーさんの将来の夢がアラファットくんをちゃんと育て上げることだと聞いた。私はこれを聞いて、19歳で子どもを産んで子どもをちゃんと育て上げるのが夢だとハッキリ言えるのが凄いなと思った。私なら、もし19歳で子どもを産んでもちゃんと育て上げるとは言えないと思うのでビーティーさんは立派だなと思った。そして一家族に一つはスマホを持っていた事だ。スマホは高価だから買えていなくて、持っていないのかと想像していた。けれど、みんなスマホを持っていて驚いた。スマホは、生活に欠かせないコミュニケーションツールだから無理をしても一家族に一つはスマホを買うそうだ。

あと話を聞いて印象に残ったのは子どもを育てるのも地域一帯でやっているということだ。日本では子どもが生まれたら基本はその家族だけで子どもを育てるが、バングラデシュは近所の人たちみんなですべて育てているようだった。だからお母さんが困ったら、近所の人々が助けてくれていた。このシステムはすごくいいなと私は思った。困った時に助けをすぐに呼べる環境だとお母さんも楽だと思うからだ。

スラム街から帰るまで、沢山の人が写真を撮った。そして、沢山の人が話しかけてくれて嬉しかった。



### ・三日目

朝、体温を測ったら熱があった。今日の遠足には行けなくなってしまった。この遠足で子どもたちと仲良くなるぞと意気込んでいたので、とても落ち込んだ。私は何もすることが出来ず、ひたすら寝て、食べるだけの一日になってしまった。しっかり休んで明日は絶対にドロップインセンターに行くぞ！

### ・四日目

無事熱も下がったので、今日はほほえみドロップインセンター(DIC)に行った。DICはKnKが運営している施設だ。子どもが無料でご飯を食べたり休息したり教育を受けられる。

昨日は熱が出てしまい遠足に行けなかったのが、今日初めて会う子どもたちと仲良くなれるか心配だった。DICは赤と白の塗装がされているビルの4階にあった。周り比べて綺麗な建物だった。中に入ると、約20人の子どもたちがいた。遊んでいる子もいる。一人の子と目が合った。手を振ると、手を振り返してくれた。温かく優しい気持ちになった。バングラデシュの街では、歩いていると沢山の人が手を振ってくれた。それが嬉しかったから私もいろんな人に手を振るようになった。日本に戻ったら、少し恥ずかしいけど外国の人に、自分から手を振ってみようと思った。

荷物を置いて早速、施設の中を案内してもらった。DICの中には約40個のロッカーがあった。このロッカーに子どもたちの私物を入れる。路上で生活していると、自分の稼いだお金や服を置ける場所がない。誰かに盗られるかもしれないという状況は不安がつきまとう。

私は身近な人に自分の大事な物を勝手に捨てられてしまったことがあった。その後の「また捨てられるかもしれない」という不安な気持ちは、眠りを浅くし、私を常に緊張した状態にさせた。ロッカーがあることによって、安心した気持ちで生活できるのかもしれない。たった一つの小さなロッカーがもたらす安心感は、多分すごく大きい。

次に、休息をとる部屋を見た。何も物がなく暗く静かな部屋だった。まるで引っ越したばかりのようだ。10人くらいが床で寝ていた。寝ている子に私が近づいても、全く動かないほど熟睡していた。子どもたちは、たとえ夜でも路上だから安心して眠ることはできない。だから日中に安全な DIC で眠っているんだと思う。子どもたちが唯一安心して眠れる場所が、この部屋なのかと思うと、なぜだか心がザワザワした。



施設を一通り見終えると、ついに子どもたちとの時間がやってきた。遠い日本のことを少しでも知って楽しんでもらえるように、私はラジオ体操を披露して、みんなとやりたいと思い準備をしてきた。私がラジオ体操を披露すると、みんな最初は不思議そうな顔をしていた。でもラジオ体操のコミカルな動きもあり、段々と笑顔が広がり、



楽しそうに一緒にやってくれた。緊張のせいで練習通りとはいかなかったけど、楽しそうな顔が見られて、私もとても楽しかった！面倒くさいと思ってやってきたラジオ体操も、こんなふうに活かせるなら無駄じゃなかったなと思った。

ラジオ体操が終わると、今度は DIC の子どもたちが、バングラデシュで有名な歌や、子どもたちが自分たちで作った歌、踊りを見せてくれた。「カエルの歌」くらいのゆっくりとしたテンポで、踊りは円になって身体を上下させながら回る不思議な踊りだった。言葉は当然分からないけど、すごく楽しい時間だったし、自分たちのために用意

してくれたことが嬉しかった。

それから、DICの子が描いた絵をもらった。男の人が片手に銃、もう片方の手にバン  
グラデシュの国旗を持って川や林の中で笑っている絵だ。どんな意味の絵なのか見た  
だけでは分からなかった。絵を描いてくれた子は、今日はいなかったから、何を表現  
しているのか聞けなかった。いつかこの絵を描いてくれた子に会って、この絵の意味  
を聞いてみたい。



私たちが交流したあとは DIC の子どもたちに向けて、健康や衛生についてのレクチャ  
ーがあった。私たちはその間は休憩していた。レクチャーが終わった後、7歳くら  
いの男の子がニコニコしながらやって来た。男の子は、私が持っていたメモ帳をト  
ントンしていた。何を言いたいのか分からなかった。だけど、男の子が一生懸命ジェス  
チャーで自分の言いたいことを説明し  
てくれたから、段々と分かってきた。サ  
インを書いて欲しいのだと。私の名前  
を漢字と英語で書いて渡してあげると、  
沢山の子どもたちが集まってきた。み  
んなサインが欲しくて集まってきた  
んだ。全員で30人くらいの子  
どもたちにサインを書いた。まるで有名人  
になった気分だ。みんなサインを貰って  
喜んでくれた。沢山サインを書いたか  
ら疲れたけど、子どもたちの嬉しそうな顔は、私のことも嬉しくさせた。



サインを書いたあとに、女の子たちと一緒にボードゲームをした。最初はルールが全然分からなかったけど、ジェスチャーで一生懸命教えてくれた。段々とルールが分かるようになってきた。ルールがなんとなく分かると楽しくなった。お互いに伝えたい、知りたいという気持ちがあれば言葉が通じなくてもコミュニケーションがとれるんだなと感じた。だけど、言葉が分かったらもっともっと色々な話が出るのに。もどかしい気持ちだった。

## DIC でのお昼ご飯

そうして、お昼ご飯の時間になった。DIC でお昼ご飯を食べた。みんなお昼ご飯の準備(ご飯を運んだり、テーブルを持ってきたり)を手伝っていた。45 人分くらいの大量のご飯だ。メニューは、お米、魚カレー、人参といんげん豆とジャガイモのカレー。

私より小さい子も食べるご飯なのだから、そこまで辛くないはずと期待していたのだが、一口食べると…魚も野菜カレーもすごく辛かった。



インドカレー屋さんで父が食べる中辛のカレーよりもずっと辛かった。私はそっと周りを見渡した。私より小さい子が美味しそうに食べている。完食だ。とても驚いた。食後のお皿の片付けも、子どもたちは自分たちでやっていた。

食後に女の子たちがバングラデシュのダンスを見せてくれた。このダンスも日本では見たことがなく面白かった。1 人が踊り出したら、2 人目も踊りだし、2 人目が踊り

でしたら 3 人目も踊りだした。みんな笑顔でいつまでも踊っていきそうなくらい楽しそうだった。私も一緒に踊ろうかと思ったけど、ダンスは苦手でラジオ体操レベルなので、やめておいた。でも、苦手でも下手でもいいから混ざったら良かったなと今の文章を書きながら後悔している。

DIC の子ども 2 人にインタビュー

ダンスが終わったあと、DIC の子ども 2 人にインタビューをした。1 人目はアブドラくん。12 歳の男の子。

ここからはインタビューの内容を紹介します。

**Q：好きな遊びは何？**

カランボード

（四角いボードの 4 つの角に穴が空いていて、3 センチくらいの平たいプレートを、一回り大きいプレートで打って穴に入れるゲーム）

**Q：何の仕事をしているの？**

港で水を買っている

**Q：毎日どのくらい稼ぐの？**

1 日 300～400 タカ

（日本円でいうと、約 390 円～520 円。一日に何時間も働いているのに、日本の最低賃金の時給の半分以下しか貰えていない）

**Q：稼いだお金は何に使うの？**

半分は食事に使い、もう半分はオーナーさんに預ける

**Q：夜はどこで寝てるの？**

シヨドルガットのターミナルで寝ている

**Q：ターミナルで寝ていて音などで不快に思うことはある？**

特に気にならない

（私は音がうるさいと全然眠れないのに！慣れてしまっているのかな）

**Q：学校には通っている？**

7～8 年学校に通っていない

**Q：何で学校に行かないの？**

学校に行きたくないから



Q: 何で路上生活になったの？

父が亡くなり、兄と暮らしていた時に、兄から暴力を受けていてそれが嫌で家を出た

Q: 路上生活をしている中で何か困っていることはある？

もう慣れたから困っていることはない

(慣れているということは、はじめはきっと沢山困っていたはず。慣れないと、生きていけなかったんだろう)

Q: 将来の夢はなに？

考え中

アブドラくんは、私の質問に全部に答えてくれた。でも、質問をしている時はずっと下を向いていた。嫌な気持ちにさせているのではないかと私は不安になって、もっと色々聞きたかったけど言葉を飲み込んでしまった。



2人目は、シャティさん。15歳の女の子。

Q: 何の仕事をしているの？

水を売っている

Q: 好きなことは何？

チョコレート売るのが好き

(シャティさんは水を売る仕事以外でチョコレートを売っているそうだ。私はとても驚いた。こんな遊びが好きとか、友だちと話すことが好き、とかそういう答えが返ってくると想像していたからだ)

Q: 1日にどのくらい稼ぐの？

200~300タカ

(日本円でいうと260円~320円だ。アブドラくんと同じ仕事をしているのに何でシャティさんの方が貰えるお金が少ないんだろうと、疑問に思った。働く時間なのか、男女差別の問題なのか)

**Q：稼いだお金は何に使うの？**

食事や衣服を買ったり、時々港を取り仕切っている人にお金を払ったりする

**Q：何で路上生活になったの？**

母が亡くなり父が再婚し、継母からあまり良い扱いを受けていなかったため家を出た

**Q：学校に行ったことはある？**

学校に行ったことはない

**Q：学校に行きたいと思ったことはある？**

昔は行きたいと思っていたが、継母が学校に行かせてくれなかったから諦めた

**Q：お父さんの家に戻りたいと思ったことはある？**

戻りたいと思ったことはない

（お父さんの家にいる方が、路上で生活しているより金銭的にも環境的にもより良い暮らしができるのではないだろうか。それでも家に戻りたくないと思うほど、継母からひどい扱いを受けていたということなのだと思う）



**Q：将来の夢はなに？**

将来の夢はない

親にとって大人にとって、子どもって一体なんなのだろう。なぜ全ての子どもが親に、大人に大事にされないのだろう。どんなに悪い子どもだって大人に優しく温かく受け入れてもらいたいと思っているはずなのに。

二人からは、将来の夢を聞くことが出来なかった。私から将来の夢を聞かれて、どんな気持ちになっただろうか。私を遠い国のお金持ちの子どもに思っただろうか。両親に大事に愛されて育った子どもに見えただろうか。私は勇気がなくて、自分が育った暗い環境を二人に話すことが出来なかった。かわいそうだと思われなくなかったからかもしれない。

**・五日目**

チャイルドクラブ（職業訓練や教育を受ける場所）を卒業した人たちと食事をしながら

ら話を聞いた。

女性が5人、男性が3人で20歳から26歳くらいだと思う。ハンバーガー屋さんだったのだけど私はあまりお腹がすいていなかったのでフライドチキンを食べた。衣が厚かったけど、激辛スパイシーではなく安心して食べることが出来た。メニューにはフライドチキンとライスの組み合わせがありハンバーガー屋さんなのに面白いなと思った。ハンバーガーは、厚みがあって大きかった。

食べながらだったので話を聞いてもメモがとれなかった。今思えば食べながらでお行儀が悪くてもメモしておけばよかったと後悔している。



ストリートチルドレンについて色々話してもらったのだが、やはり環境はずっと良くないということだった。(そもそもストリートチルドレンなのだから良い環境とはいえないのだが)一番は、教育を受けられないこと。教育を受けていないから生活できるレベルの給料がもらえる仕事に就くことが出来ない。しかしそれをどうにもすることができない。そしてそんな子どもが大人になる。教育を受けていない大人が道にゴミを捨てる。それを見た子どもが真似をして道にゴミを捨てる。そんな子どもが大人になる。その連鎖が続くのだという。

子どもに対してだけではなく、大人への教育も足りていないから大変なのだということを知らなかった。大人って色んな事を知っていてたくさん勉強してきたのだと当たり前のように思っていた。子どもに対しての教育だけ助けてあげたらうまくいくのかと思っていた。それだけじゃダメだなんて。ずっと支援を続けて、何年経ったら生まれてきた子どもたちみんなが安心して暮らせるようになるのだろうか。そんなことを考えたとき、私ひとり、どれだけの力になるのだろうかと思った。お小遣いか

ら50円寄付したとしても、大きな力になんてならない。ああ、そうか。だから私はここにいるのか。私のお小遣いから出せる50円が、私のクラスの仲間全員分になったら？学校の全員分になったら？私のレポートを読んだ子どもが募金活動をしてくれたら？そんな学校が100校になったら？プレッシャーが重くのしかかった気がした。



チャイルドクラブ卒業生と別れ、バッダ地区に移動した。沢山の工場が集まった場所の一角にある車の修理工場取材した。学校の教室くらいの広さで、壁一面に道具がかかっている。天井からも車の一部や道具が吊るされていた。照明は2つしかなく、工場なのに薄暗かった。私のイメージする工場とはずいぶんかけ離れていた。しかも一番驚いたのは、床にガラスの小さい破片が300個以上落ちていた。何かに引っかかって転んだら大けが間違いなしだ。スタッフがケガをしたとき用の救急箱もあったが、まずケガをしないようにガラスの破片を片付けたらいいのにと考えたが無言で話を聞いていた。

工場のオーナーさんにインタビューをした。4人の男性で、40代後半くらい。ひょろろとしていて、一人は作業服のような汚い服を着て、あとの三人はあまり汚れていない服を着ていた。

**Q：KnK が地域の工場のオーナー同士で労働環境の改善を促すプロジェクトに参加してどう変わった？**

以前はオーナーが、子どもだからといって低い賃金で雇ってはいけないということを考えたこともなかったが、子どもでも働いた分だけ支払うというルールを作って、今でもそのルールを守っています。



従業員がケガをしたときの対処法がわからなかったが、教えてもらったのでわかるようになった。

オーナーと従業員の関係性がよくなった。

子どもの従業員にどう接すればいいかわからなかったが、教えてもらってわかるようになった。

**Q：プロジェクトでの思い出は？**

KnK の人たちが集まって、みんなで話す時間が思い出に残っている。

**Q：何か他に手助けしたほうがいいことがある？**

子どもたちの住む場所を提供してほしい。

従業員の子ども（14～17歳くらいの男の子二人）へのインタビュー

**Q：KnK がプロジェクトをする前と後で変わったことは？**

ほかの人に対して、礼儀正しく接するようになった（礼儀正しい接し方を教えてもらった）

**Q：困っていること、オーナーにこうしてほしいと思っていることは？**

就業中の問題、困ったことをみんなで解決したい（今は個人での問題ごとになっている）

制服や交通費（船に乗って通勤している）を出してほしい。

**Q：将来の夢は？**

自分の工場を海外でやってみたい。

海外で何かをしたいと思うなんて勇気がいることだと思うのに、やってみたいと思うってすごいことだなと思った。

KnK がプロジェクトを行って、全部がうまくいっているのかと思ったら、まだ問題



はあるということを知れた。何か支援したからといってすべてよくなるわけじゃないというのは、考えたら確かに想像できるけど、なぜか支援＝すぐに解決だと私は思っていた。相手は人間なのだから、対応や対策もそれぞれに合わせて必要になったりする。支援って言葉にしたら簡単だけど、全然簡単じゃない。

インタビューが終わった後、従業員の男の子の一人がずっとポケットからスマホを出したりしまったりしていた。何かしたいのかなと思っていたら、夏和ちゃんが、私たちと写真を撮りたいのだと気付いて、夏和ちゃんが「一緒に写真を撮ろう！」と提案すると二人は笑顔になった。二人と写真を撮った。私は全然気付かなかったし、気付いたとしても声をかけられなかったかもしれない。夏和ちゃんは勇気があってかっこいいなと思った。私もそんなお姉さんになりたい。



## ・六日目

朝六時に出発、大型船がたくさん来るターミナルへ行った。

気温は34℃くらい。曇り。

歩いていると、栈橋の端っこで10歳くらいの男の子が床で寝ている。



1メートルくらいの汚い青い布を敷いているだけだった。手も足もその布からはみ出していた。道で子どもが寝ている光景を目にしたのはそれが初めてで息が止まりそうだ。同じくらいの年齢の子どもなのにとすると、何かがこみあげて苦しくなった。

DICに通う男の子たちが、私たちを見つけて笑顔で駆け寄ってきてくれた。その子たちに、いつもどこでどんな風に寝ているのか見せてもらった。栈橋の端で、大きいビ



ニール製の袋を床にして二人が寝転がった。すごく狭そうだった。この敷物は、個人のものではなく、ストリートチルドレンの共有物で栈橋の柱にくくられていて、みんなで使っている。子どもたちとジェスチャーを交えながら話をしていた。

すると突然、通行人の男の人が、一緒に話していた男の子を叩いた。さっきまでの笑顔は消え、おびえていた。私はあまりに突然で、驚いてしまったしこわくなった。スタッフさんの話だと、道にいて邪魔だと思ったから叩いてどかそうと思ったのではないかとのことだった。理由はなんであれ、叩かれたり蹴られたりするかもしれないと思って生活するなんて。本当に安心からはほど遠い環境で生活しているのだなと思った。また私は苦しくなってしまった。

叩かれた男の子は、DICのスタッフさんに数分なだめられたあと、もう笑っていた。

でも多分、心は泣いたままだったんじゃないかな。私も頑張って笑顔を作ったけど、苦しいままだった。男の子になにか声をかけたかったけど、うまく言葉にならなくて、なにも言えなかった。私はきっと、少しは男の子の気持ちがわかるはずなのに。勇気がでなかった。

しばらくすると40mくらいの船がターミナルについた。



船を見るなり15人くらいの子もたちが船へ走って行く。私たちも慌てて走って追いかけると子どもたちは次々に船に乗っていく。KnKのスタッフさんに「乗って！」と言われて船に飛び乗り、降りてくる乗客をすり抜けて中に入る。子どもたちを探そうと見渡したけどうまく探せなかった。しかし、直後に船の乗務員さんが大きな声で怒鳴っている！何と言っているのかはベンガル語なのでわからなかったけど、船に乗り込んだのが見つかって、降りろと言われてたらしい。慌てて今度は船を飛び降りて子どもたちが降りてくるのを船の外で待っていた。

すぐに両手にたくさんの空のペットボトルをもって出てくる子どもたち。空のペットボトルは使いまわして飲み水を入れてまた船の乗客に売るために拾っているのだ。ペットボトルを洗っていると言っていたけど、洗剤を使っているかどうかはわからない。不衛生だなと思った。もし洗剤を使っていたとしても私は使いたくない。誰が使ったかわからないようなペットボトルをまた使うなんて考えられなかった。しかし彼らにとっては日常なのだ。

ペットボトルの水を買うのは、あまり豊かではない大人か、それかストリートチルドレンのために少しでも役に立てるようにと寄付する気持ちで買う人もいるのかなと想像した。

そのあとターミナルで、子どもがペットボトルを洗っているところを取材できたらと



思い歩き回って探したけど見つからなかった。本当に洗っているのかな。

そのあと、DICに行くために小舟に乗った。三人の子どもたちと他の乗客合わせて12人くらいが乗り込んだ。船は思っていたより揺れず、川の水は灰色で、あちこちにゴミが浮いている。緑色の水草がいっぱい浮いている。

DICがある場所には2分くらいで到着した。DICについてからは、DICのスタッフのファルザナさんに話を聞いた。

**Q：いつからDICで働いているの？**

11年前から

**Q：働くようになったきっかけは？**

子どもとかかわるのが好きだったから

**Q：DICでの思い出は？**

子どもたちが食べ物を奪い合っていた時に喧嘩を止めたこと、ズボンのベルトがついていない子にベルトをつけてあげたこと



**Q：子どもたちの変化はある？**

自分の名前が書けなかった子が書けるようになったり、小さな喧嘩が少なくなってきた。

将来について、自分で考えるようになった。衛生的な行動など、自分の身の周りのことが出来るようになってきたこと。



りたい。

**Q：子どもたちにどんな大人になってほしい？**

社会になじんで働けるようになってほしい。だけど、なれるかはわからないから簡単には望めない。

**Q：将来の夢は？**

もっとたくさん子どもとかかわれるようになること。

（お金があればだけど）自分で学校を作

インタビューが終わったあと、ファルザナさんに左右の腕から指にかけて、ヘナタトゥー（ヘナという植物のエキスを使ったもので絵を描く、数日間落ちない）をしてもらった。

30分くらいかけて描いてもらった。お手本などなにも見ないできれいな模様をどんどん描いていく。魔法みたいでドキドキした。



それから DIC を出て、KnK と一緒に DIC を運営していて、バングラデシュの NGO の全体を取り仕切る立場にいるティップさんの家に行った。

ティップさんの家は、住宅街の中にあるマンションの4階にあった。ワンフロアすべてがティップさんの家で、私の学校の体育館くらいの広さがあった。中もすごく綺麗で、家族写真が壁に何枚も飾ってある。今まで見てきた建物の中で一番豪華で驚いた。同じバングラデシュ人でも、こんなふうに住む環境が違うのだな。

私と夏和ちゃんは、少し疲れてしまったのでティップさんの娘さん（17歳）のベッドをお借りして30分くらい休ませてもらった。ティップさんの寝室にも娘さんの寝室にもトイレと洗面所がそれぞれついていた。



ティップさんの奥さんが料理を作ってくれたので食事をした。

DIC では、床に低い台を置いて手を使って食べたけど、ティップさんの家は日本で見えるようなダイニングテーブルで、スプーンとフォークで食べていた。バングラデシュ人はみんな手で食べるものだと思っていたので驚いた。こんなふうに立場によっては文化もどんどん西洋化していくのだろうか。

魚のすり身を丸く揚げたもの（串にひとつずつ刺さっていた）と、ニンジンとほうれん草のあんかけ（ご飯にのせて食べた）、川魚をカレー味に揚げたもの、肉の入ったカレーと、デザートに手作りのバニラアイスとプリンまで用意してくれた。

ティプさんの奥さんが、日本人だから辛くしていないと言っていたが、DICのご飯ほどではないが辛くて、また残してしまった。せっかく作ってくれたのに申し訳ない気持ちになった。あんかけや他の料理はとてもおいしかった。

食後に、ティプさんの娘さんにヘナタトゥーをしてもらった。花のデザインで模様がとても細かく綺麗だった。ファルザナさんにしてもらったものとデザインが違っていた。



ティプさんの家を出て歩いて5分くらいのところにある、SUF というところへ行きました。SUF は、スラム街に住んでいたり、貧しくて学校に行けない子どもたちのための勉強や職業訓練をする施設だ。



そこに通う子どもたちは制服があり女の子は青いワンピース、男の子は SUF のロゴが入った白い襟付きシャツを着ていた。全部で教室は8つほど。小学校5年生から中学2年生の教室を見せてもらった。二人横並びの机で、クラスは25人前後。男女別のクラスになっていた。年齢によって学年が変わるのではなく、勉強のレベルでクラスが分けられていた。バングラデシュでも無償の公立の学校はあるらしいけど、家が貧しいと家の

手伝いや仕事をしなくてはならなくて公立の学校に行けなかった子どもたちのために SUF の施設があるのかなと想像した。どのクラスも授業中だったけど、お邪魔させてもらって自己紹介をした。みんな笑顔で拍手してくれた。急に入ってきた外国人を受け入れてくれたので少し安心した。

### Q:放課後にやることはありますか？

男子は全員働いているので、市場やスーパーなどの職場へ働きに行く。女子は一人だけヘナタトゥーの仕事をしていて、あとの女の子は全員お母さんの家事の手伝いをするそうだ。

SUF では午前と午後にそれぞれクラスがある。スラム街で取材したスレーヤさんと、ボルーナさんは、SUF に通っている生徒で、午前のクラスの生徒なのだそうだ。今回

取材したのは午後のクラスだったのだが、話を聞くと驚いた。午前中に働いて、午後にSUFへ通い、そのあとまた働きに出るのだという。私と近い年くらいの子どもが働いているだけでも驚くのに、学校にも通って午前も夕方も働くななんて！私は朝から15時ごろまで学校があるだけで大変だなと感じるのに。

教室を見終わった後、教室が二つ分くらい大きな部屋に行った。そこに机はなくプラスチックの椅子が壁に沿って15個くらいあった。壁に子どもたちが描いた絵や作品が飾られていた。その部屋の中には二人の女の子がいた。二人は黄色い民族衣装を着ていた。そのあと6人くらいの女の子が制服のまま入ってきた。何が始まるのだろうとドキドキしていると、みんなで歌とダンスを披露してくれた。



ダンスの途中で女の子が私と夏和ちゃんの手を引っ張ったのでびっくりした。一緒に踊ろうということらしかった。少し恥ずかしかったけど、一緒に踊った。盆踊りのように丸くなって踊った。振り付けは全然わからなかったけど、みんなで楽しく踊った。

そのあと職員室と職業訓練をしているクラスへ行った。職業訓練のクラスでは、20歳くらいの人に見える人たちが男女混合で学んでいた。ここでは観光ガイドになるための訓練をしていた。観光に力を入れているネパールのガイドを二人呼んで教わっているようだった。

このクラスでは日本の漫画が好きで、自分の名前と好きな漫画を日本語で話せるという男性がいて、披露してくれた。日本のことに興味をもって日本語まで話せるような人がいるとは思っていなかったのが驚いたし、うれしかった。

別のクラスでは、バングラデシュがどんな国かどう伝えるための動画を作るための職業訓練をしていた。他の日には、女性向けで織物の訓練もあるそうだ。職業訓練と言われて、機械を扱ったりするものなのかなと勝手に想像していた。観光ガイドの訓練が行われているなんて思っていなかったのがとても驚いた！

## ・七日目

今日も船のターミナルに行く。

栈橋で生活をしている子どもたちと DIC まで一緒に行くためだ。



4人の男の子と一緒に小舟に乗って DIC まで行った。DIC につくとすぐにカランボードで遊び始めた。みんな遊び方やコツを教えてくれて上達した。ワイワイ笑いながら楽しんでいる中に入れてもらったのが嬉しかった。

KnK のスタッフが持っていった白と黒のTシャツを配ると、子どもたちはみんなすぐに着替えた。そのあと、またラジオ体操をした。今日はなんとなくラジオ体操の振り付けを覚えてくれている子もいたので、前よりも、もっと一体感が出来たような気がして楽しかった。



ラジオ体操が終わると、みんなで腕相撲をした。私よりも体が小さい子に負けてしまった。どの子もすごく強かった。毎日2Lのペットボトルを両手に4本持って売って

いると聞いた。子どもたちがどのくらい大変な仕事をしているのか初めて実感した。

DIC の子どもたちに、一緒に遊んでもらえて楽しかったです。またどこかで会えたら一緒に遊びたいなと言ってお別れの挨拶をした。DIC の子どもたちからも、男の子と女の子一人ずつにメッセージをもらった。もし次会ったら、必ず遊ぼうねといったメッセージだった。友達だと言ってもらえたようで嬉しかった。帰る前に一人ずつハグをした。



その時になって「もっとみんなとたくさん話してたくさん遊べばよかった」と強く思っていて辛くなってしまった。私たちが DIC を出た後も、ドアからみんな身乗り出して手を振ってくれた。

車を出発しようとする、男の子二人が駆け寄って手を振ってくれた。車の中から手を振った。

DIC から二時間かけて、お土産を買うためショッピングモールへ行った。ショッピングモールの中でも子どもはいた。身なりは DIC の子どもたちよりも綺麗な恰好をしてお母さんに手をつながれている。さっきまで会っていた子どもたちとはまるで違う。たくさん子どもたちをバングラデシュで見かけたけど、本当に貧富の差は大きいと思う。でも、スラム街や DIC、SUF で出会った子どもたちはみんな笑っていた。笑顔の裏にどれだけの苦しみがあったのだろう。目をつぶると、私は今でも時々、母の怒った顔と叩こうと迫ってくる手が浮かぶ。思い出して動けなくなる時もある。だけど、私がバングラデシュで出会ってきた子たちはみんな、立ち止まったら生きていけないんだ。働かなきゃ生きていけないんだ。なんでそんなことになっているんだ。苦しくて、ふわふわの布団に突っ伏して泣くことがある。だけど数時

問したらご飯を用意してもらって、あたたかいお風呂に入ることが出来る。私は大変な環境に置かれている子どもたちの気持ちが少しはわかるんじゃないかと思って、この友情のレポーターに応募した。だけど、子どもたちの気持ちは、よくわからなかった。私とは、全然違っていたのかもしれない。だけど、今顔が浮かぶ“ビーティー”や“アブドラ”が、必死に生きて苦しみながら笑っているんだということがわかった。私に出来ることってなんだったのだろうか。もう帰るだけになってしまった。なにも出来なかった。色々なことがもう頭いっぱいになるくらいグチャグチャに考えながら、渋滞している道を車で空港へ向かった。



第34回 友情のレポーター（2023） 落合 碧

## 第34回 友情のレポーター（2023）バングラデシュ取材レポート

松元 夏和（京都府／当時 17 歳）

### 「当たり前前に気付くこと」

第34回友情のレポーターとしてバングラデシュに派遣されました、松元夏和です。このレポートでは、私が、私の圧倒的な主観で、バングラデシュで見て、聞いて、感じたことを、私の頭の中の辞書にあるありのままの言葉で綴ろうと思います。私が現地で考えたこと、感じたことが、100%これを読んでくださっているみなさんに届くとは思っていません。きっと伝わっても70%ぐらいしか届かないと思います。でもそれでいいんです。むしろそれがいいんです。残りの30%は、これを読んでみなさんが考えたこと、感じたことでこのレポートを完成させていただければと思います。

#### ○友情のレポーターとの出会い「今年の夏これ行く。」

私は、島根県の隠岐郡にある、本土から50kmほど離れた海士町という離島で、寮生活をしながら高校に通っています。

ある日、寮のハウスマスターさん（寮のご飯を作ってくれる人ではなくって、事務の人でもなくって、寮生のメンタルを支えてくれたり、学校と寮生の架け橋になってくれるような存在だと私は思っています。）が、寮生のslackに、「私が高校生だったら絶対応募すると思うから興味ある人見てみて!」という言葉とともに、サイトのリンクを投げてくださいました。そのサイトを見たとき、私は“これしかない”と強く思いました。

それが、この友情のレポーターの募集要項のサイトでした。そのあとすぐ、母にサイトのリンクと、「今年の夏これ行く。」というメッセージだけ送りました。

#### ○なぜ応募しようと思ったのか 「ずっと変わらない夢」

私が小学4年生のとき、たまたまテレビでUNICEFのCMを見て、とても大きなショックを受けました。当時の私は、世界中どの国でも日本と同じように電気やガスが使えて、子どもたちは当たり前前に学校に行っていると思っていたのです。特に、画面に映る自分と同じか、自分よりも小さい子どもたちが、ボロボロの服を着て学校にも行かずに働いている光景は、大きな衝撃でした。「自分がこの世界の状況を変えなければいけない。」そう強く思いました。

ちょうどその頃、学校の宿題で世界の国旗を調べていると、日本の国旗とよく似たあ



る国の国旗を見つけました。母が「その国旗の国は、世界で一番貧しかった国なんだよ。」と、教えてくれました。その瞬間、自分の中で点と点が線につながる感じがして、不思議と将来はこの国で現地の状況を変えるために生きているんだろうなと思いました。その国こそがバングラデシュでした。

それからは、学校に行くことができない子どもたちがいることに大きなショックを受けたため、「学校に行けない子どもたち(小学4年生の時点では、発展途上国の、経済的な理由で学校に行けない子どもたちのことを考えていましたが、今はそれだけではなく、病気やいじめ、家庭環境などの事情を抱えているが故に学校に行けない子どもたちのことを考えています)が、学校に行けるような制度を作ること」が私の夢になりました。それまでは、パティシエになりたいとか、お花屋さんになりたいとか、ころころと将来の夢が変わる私でしたが、この夢だけは、夢を持ったその日から7年が経とうとしている今でも、ずっと変わらないのです。

そして、本当に運良くこの募集を見つけて、夢を叶えるためのスタート地点を頂いたと思い、応募するに至りました。

### ○バングラデシュに行くまでの心境 「自己肯定感と不安と」

ゴールデンウィーク返上で、徹夜で KnK に出すレポートを完成させ、KnK にレポートを提出してからというもの、まだかまだかと結果を待っていました。誕生日2日前の5.29に合格を知らせる電話がかかってきたとき、ずっとずっと行きたかったバングラデシュに行けることになったのにもかかわらず、全く実感が湧きませんでした。

それから飛行機のフライトまでの約2ヶ月間はあっという間で、段々と実感が湧いてくると共に、「向こうのご飯はちゃんと食べられるだろうか」とか「ちゃんと私を受け入れてくれるだろうか」とか、何よりも「これまで画面や文字でしか見たことのなかったバングラデシュの現実を、私は受け入れられるだろうか」というような不安でいっぱいになりました。憧れていたものも、いざ自分の手に入ると、それに恐怖心を覚えたり、不安を感じたりすることを学びました。

そしてもう1つ、合格の知らせが来てからバングラデシュに降り立つまでに、私自身が学んだこと(変わったこと)があります。それは、少しだけ自己肯定感が上がったということです。私は、小学校から中学校にかけて、周りの友達や先生、大人達に言われた厭わしい言葉によって、自己肯定感がほとんどなく、いつ誰にどんな素敵な言葉をかけられても、マイナスにしか捉えられないようになってしまいました。でも、この友情のレポーターに合格した時、私の容姿でも、成績でもなく、私自身(私そのもの)を評価してもらって選んでいただいたわけだから、「私は私のままで良いし、それを評価してくれる人はいるんだな」と思えるようになりました。今でも、過去のトラウマに悩まされる日々はあるけれど、この友情のレポーターに選ばれたという経験が、そんな私を助けてくれるようになりました。

ここからは、現地で過ごした7日間を書いていきたいと思います。日記のような感覚で見ただけだと嬉しいです。

## <1日目 バングラデシュへ>

8月3日。

前泊していた空港近くのホテルの朝食バイキングで、ありえないぐらいの量のご飯を食べて、空港行きのバスに乗った。今日私がバングラデシュに降り立つなんて全く想像できなくて、不安8割、ワクワク2割という感じだった。それでも、飛行機は飛んでしまうわけで、11:10に成田空港を出た。



シンガポール行きの飛行機はほとんど日本人がいなくて、海外の方に囲まれてのフライトだった。機内食は chicken or beef の2種類から選べた。

CAさんに「chicken or beef?」と開かれた瞬間は、それぞれのバックグラウンドが違う、食文化も好みも違うこの飛行機に乗っている何百人の乗客が、2種類のメニューから今日のお昼ご飯を選んでいるのがなんだか不思議だったし、逆に彼らとの繋がりみたいなものを感じられた瞬間でもあった。お箸がなかったのと、メニューの中に「そばとチーズ」という日本じゃ考えられないような組み合わせがあって、少しだけ日本を離れたという実感が出てきた。

シンガポール経由、ダッカ行きの飛行機だったので、一度シンガポールで飛行機から降りた。シンガポールが私の初海外となった。初めての海外は、空港の中にスカイトレインと呼ばれる電車が走っていたり、滝が流れていたり、とっても大きなコーヒー屋さんがあったりと、そのスケールの大きさにただただ圧倒されるばかりだった。なかでも空港内にあるトイレは、トイレトペーパーが出てくる装置が全然日本と違ったり、手を洗う鏡の下からティッシュが出るようになっていたり、トイレ内に利用者がトイレを評価できるスクリーンがあったり、とても面白かった。でもベビーチェアは日本製のものが使われていて、少し嬉しくなった。そんなこんなでシンガポール・チャンギ空港とお別れし、いよいよ旅の目的地であるダッカへと出発した。



この飛行機の中でも機内食が出て、私はチキンカレーにしたのだが、早速本場の辛さの洗練を受け、半分ほどしか食べられなかった。「お腹痛くなんないといいな。」なんて考えながら、窓から外を覗いてみると、海へとつながる川に浮かぶ船がキラキラと輝いていた。 バングラデシュだ。

長旅も終わり、疲れ果てて降り立ったダッカ・シャージャラル空港はもわーんとしていて、蒸し暑かった。空港は私が思っていた以上に綺麗だった。カメラを回しているからなのか、私達が日本人だからなのか、通り過ぎる人みんなに注目されながら空港の駐車場を出た。

出るや否や、鳴り響く車のクラクションのオンパレード。なんとか駐車場を出たら、あり得ない量の車が道にごった返していた。車線も信号機もなく、とりあえず入った者勝ちみたいな感じの道路。車にはバンパーを保護するための鉄のヘルメットみたいなものが必ず付いていて、バングラデシュの交通事故の多さを物語っていた。それな



のに、車の上に人乗ってるし、電車の上にも人乗ってるし、バイクはヘルメット被ってないし、バスのドア全開きだし、高速道路ぐらい速度出すし…。

「ありえない」この言葉しか出てこなかったけど、本当に日本の日常からは想像できない刺激がたくさんで、ただ車に乗っているだけなのにとても楽しかった。

## 〈2 日目スラム街訪問〉

昨日はホテルに着いたのが深夜だったので、今日はお昼からのスロースタート。スラム街を訪問する日だ。

車に乗って目的地へと向かったのだが、その時は雨が降っていて、車から外を覗くと頭にビニール袋を被っている人がチラホラ...。「え?それ意味ある?逆に蒸れるんちゃう。」なんて心の中で突っこみながら着いたのは、スラム街から少し離れた住宅地。そこから少し歩くと、明らかにさっきまで見ていた風景とは違う風景が見えてきた。それがスラム街だということは、説明されなくてもすぐに分かった。



これまで、スラム街を写真で見たことはあったけれど、その中に本当に自分自身が入り混んだとき、ずっと見てきた写真の中に飛び込んでいるみたいで、そこにいるのにどこか現実味がなくて、スラム街にいる自分が写っている写真を、客観的に自分が見ているような感じだった。そのスラム街では、二軒のお宅を訪問してインタビューをしたのだけれど、テレビ

の画質の悪さや、子どもたちの持っているスマホの画質が悪くて、本当に同じ時代に生きているのか、と疑った。(タイムスリップした感じ、異世界にいる感じ)

一軒目のお家は、ベッドと、その横に人1人分寝れるか寝れないかぐらいの床があって、私達レポーターとスタッフさんは、ぎゅうぎゅう詰めになりながらそこに入って、すぐにインタビューを始めた。

初めてのインタビューは、「良い質問ができるだろうか。」とか、「嫌な気持ちにさせるようなこと聞かないだろうか。」とか、不安でいっぱいだった。それでも話を聞いていくうちに、「もっとこれを聞きたい!」とか「あれはどう思っているのかな?」という疑問がたくさん生まれたし、なによりそこに住む“生の声”を聞いて、インタビューではあるけれども、彼らと“会話”できていることがとてもとても嬉しかった。



©Natsuki Yasuda

次に二軒目のお家にお邪魔させてもらって、同じくインタビューをした。ここでそのインタビューで聞いたことと、私が感じたことを書こうと思う。

—何人でこの家に住んでいますか？

- A.七人
- ・父
  - ・母 シュリカ
  - ・長女 ビーティー 19歳
  - ・長男
  - ・次女 スレーヤ 16歳
  - ・三女 ボルーナ 14歳
  - ・ビーティーの息子アラファット 10ヶ月

(このお家もさっきのお家と同じぐらいの広さで、2階があるとはいえど、7人で住むには到底十分な広さとは言えなかった。)

—学校の時間はどのくらいですか？

A.a.m.8:00~a.m.10:30まで

(1日にこれだけの時間で、何かを学ばせるためには相当な教育の質が求められると思うし、短すぎると思った。)

—将来の夢はなんですか？

A.医者

先生

息子を立派に育てあげる

(即答した彼らの目はきらきらしていて、なぜか彼らならこの夢を叶えられちゃうんじゃないか、と思った。正直、教育は日本のほうがバングラデシュに比べて発展していると思うし、日本では義務教育から高校、大学、就職という一連の流れができているから、夢を実現するにはこれ以上ない環境であると思う。「医者・先生」になれる確率は、日本の子どもたちの方がうんと高いはずなのに、日本の子どもたちが語る夢はなぜこんなにも現実味(叶いそうな感じ)を帯びないんだろう。周りの環境なのか、関わる大人の影響なのか……。

でも私はその時、彼らには得体のしれないエネルギーが潜んでいて、それが彼らの夢に現実味を持たせているんじゃないかと思った。自然と「きっと叶うよ。」という言葉葉を口にしていた。)



このお家でインタビューをして一番ビックリしたことは、長女(ビーティー19歳)が母だったということだ。お家に入った時、ベッドの上に三人の少女と赤ちゃんがいたから、4人きょうだいだと思ったが、赤ちゃんはビーティーの子供で、とても衝撃を受けた。

また、将来の夢でビーティーが「子供を立派に育てること」

と言っていたのもとても印象的で、わずか私と2歳しか年が変わらないのに、妊娠、出産を経験し、今は母として懸命に子育てをしている姿に強く心打たれた。

少しインタビューの話とは逸れてしまうが、このお家でインタビューをしている時に、この家の子どもではない女の子が、インタビューをしているという噂を聞きつけてお家に入ってきた。目がくりっとしていてもとても可愛い女の子で、ベッドに手招きしたら登ってきたので、一緒にインタビューをすることになった。その子がベッドに登ろうとする姿があまりに可愛かったから、「よく来たね」という意味を込めてその子の頭を撫でたのだが、その瞬間に菜津紀さんが、「頭はやめといたほうが良いかも!」と言った。日本では、小さい子どもに愛情を込めて頭を撫でることは当たり前だから、なにがいけなかったのか分からなかったけれど、ホテルに戻って調べてみると、“アジアの一部では、他人の頭を触ることは失礼に値する”と記された記事を見つけた。だからあの時あのようになされたのだと納得した。海外では日本の当たり前が通じないことを身をもって痛感したし、自分の中では日本の当たり前で接したり、受け止めたりしないように心がけていたつもりだったけれど、それが全くできていない自分がかかりした。この経験から、海外に行くとなると「当たり前は通用しない」ことを意識しがちだけれど、「現地の当たり前を知る(情報収集)」ことも同じくらい意識するべきことなんだと気付いた。

はじめインタビューをしたお家の娘さんには、あんまり受け入れら



©Natsuki Yasuda

れていないように感じていたけれど、シャイな女の子だったみたいで、二軒目のお家でインタビューをすることになったら付いてきて、インタビューが終わるまでの間、ずっと窓から顔を覗かせていて、インタビューが終わったら一緒に写真を撮ったりして…!その子が心を開いてくれたから、それがスラム中に伝わって、最後に帰るときにはスラム街に住むたくさんの子ども達に囲まれながらお別れをした。

「スラム中に伝わる」という表現をしたけど、本当にスラム街の人は、お互いのことはなんでも知っている、大家族のようだった。このスラム街で感じた“つながり”といのは、彼らの強みだと感じて、その強みはとても大きな力であるから、彼らが一致団結して活動したら、とても大きな組織になるのではないかとその時は感じた。しかし、帰国した今は、その「つながり」が逆に彼らを縛る鎖になっているのではないかと考えるようになった。

私は、小中一貫の学校に通っていたが、いつも同じ学年の人達との「つながり」を意識するがばかりに、その組織の中から抜け出すのが怖かったり、その「つながり」を持っていない人と関わることに、とてつもないハードルを感じていた。私の実体験と彼らを重ねて考えたことで、このように考えるようになったのかもしれない。

今はまだ、「つながり」がもたらすメリットとデメリットぐらいしか思い浮かばなくて、‘メリットを活かして〇〇したらどうか!’とか、‘デメリットにはこう対策すべきだ!’みたいに具体的な答えは出せていないけれど、それはこれからの私の課題にし、長い年月をかけて考えていきたいと思う。

たくさん学ぶことがあった 2 日目のスラム街訪問。すでにこの友情のレポーターにやりがいを感じながら、クラクションの鳴り止まないホテルまでの道を車で走っていると、渋滞で車が止まった。すると、道端から男性が車に寄ってきてお金をねだってきた。その人には腕がなかった。「この国の障がい者支援はどうなってるんだ!」とか、「可哀想」なんてその時は思えなかった。ただ、その人が私を見つめる目の色は、眼差しは、キラキラでもなくて、真っ黒でもなくて、どんな言葉でも表せないような色で、眼差しで。ずっと脳裏に焼き付いて離れなかった。

### 〈3 日目 子どもたちとの遠足〉

今日は、この旅が始まる前に KnK から送られてきた行程表を見た時からずっと楽しみにしていた、子どもたちとの遠足。心を躍らせながら、もう慣れてしまったクラクションが鳴り響く道を車で走った。

車を降りて、目の前に広がった国立博物館アーシャンモンジール(通称ピンクパレス)は想像以上にピンクで、周りの建物がいつも以上に灰色に見えた。ピンクパレスの中に入って少し待っていると、バングラデシュの国旗色のユニフォームをまとった子どもたちが、笑顔で手を振りながらやってきた。私を囲んだ子どもたちの目の輝きは、

これまで見てきたどんなキラキラしたものよりもキラッキラで衝撃を受けた。



それから、ピンクパレスの見学が始まった。私は常に大勢の子どもたちに囲まれていて、みんな一生懸命ピンクパレスの中を案内してくれた。私はベンガル語が全くわからないけれど、だからといって子どもたちは通訳の人に頼ったり、私を1人にするとはなかった。ちょっとした英単語とジェスチャーで、理解することができた。よく



海外に行くと、日本にいるよりも早く現地の言葉を習得できると思うけれど、それは相手の「伝えたい」に「応えたい」という気持ちが芽生えるから、習得が早いんだと思った。実際に子どもたちは、すごく積極的に、前のめりになって私に伝えようとしてくれて、それに応えられないのがすごくはがゆい感じで、「ベンガル語が話せればどれほど良かっただろう。」と思った。

ピンクパレスを離れて、レストランに移動しているとき、事件が発生した。車の進行方向と反対向きに座っていた子が、車に酔って吐いてしまったのだ。でも私はそれに気づくのに時間がかかった。なぜなら、その子は泣き叫ぶこともなければ、わめきまわることもしなかったからだ。一人で静かに袋に吐いて、しかもそれを他の子が見たら気分が悪くなるだろうと思って、下の方で見えないように隠していたのだ。まだ小学



4年生にもならないように見える子だった。これができるからどうか、できないからどうかではないけれど、同じ年齢の日本の子どもにはできないことだと思った。レストランに到着すると、みんなで一緒に手を洗いに行ったが、念のために私が除菌シートを使って手を拭いているとみんなが不思議そうにしていたから除菌シートをあげたら、みんなとっても嬉しそうに手を拭いていた。特権だと思った。私が日本人であるからそれに興味を持ったのか、初めて見る得体の知れないものを試してみたいという気持ちだったのかは分からないが、私がこの特権を使うことで、子どもたちや、バングラデシュにいる人たちに変化(ex.感染症対策をしてもらえるようになる)をもたらすことができるのかもしれないな、と思った。

半日子どもたちと過ごして、疲れ切ってホテルに戻った私。その時ふと思った。今日同じ量遊んで、同じように疲れている子どもたちは、今から仕事に行くんだ、と。これから安全な場所で、たくさんご飯を食べて、お湯が出るシャワーを浴びて、あったかいお布団に入ろうとしている私が、惨めで、「なにしてんだよ。」って思ってしまった。明日もまた子どもたちに会いに行く。きっと今日子どもたちに会った時の表情とは、違った表情で彼らと会うことになるだろう。

#### <4日目 DICに訪問>

「え、なんかツラくない。」なぜその時急にそんなことを思ったのかは分からないけど、朝起きてすぐにこう思った。バングラデシュは、やはり日本よりも生活しにくい。突然お湯が出なくなるシャワーに、1時間待たないと出てこないホテルの料理。でも、辛くない。いつも誰かに評価されているような気がして、怯えないといけなかった日本の生活はもうそこにはなかった。誰かに合わせて愛想笑いなんてしなくて良くて、本当に楽しくて、楽しくて、全力で笑顔になれる日が、瞬間が、バングラデシュに来てからたくさんあった。だからこんなふうに思ったんだと思う。

この日は、昨日遠足に行った子どもたちが普段から通っているドロップインセンター(以下 DIC)を訪れる日だ。

DICの建物の前の、マーケットが並ぶストリートに着くと、昨日見たキラキラした瞳が一つ。「Hey! KANAMI(カナミ!)」と声をかけられた。昨日の遠足に来ていた子どもだった。覚えてくれていたのがすごく嬉しくて、私も笑顔で「Hai!」と返した。

DICに入ると、たくさん子どもたちが私たち2人を出迎えてくれた。昨日遠足に来ていた子もいれば、来ていなかった子も。(DICは、子どもたちが好きな時に来れる場所なので、何日も連続で来る子もいれば、ぴたりと来なくなってしまう子もいるらしい。)

そんなたくさんの子どもたちの前で、日本紹介をした。私は、幼い頃から習っていた少林寺拳法を。碧ちゃんは、事前にたくさん練習したラジオ体操を。子どもたちは、初めて見るものに驚きつつも、すごく喜んでくれた。私たちの日本紹介が終わったら、なんとサプライズで日本紹介ならぬ、バングラデシュ紹介をしてくれて、歌や踊りを披露してくれた。とっても素敵だったし、なにより、私たち2人の為にやってくれた事が、とても嬉しかった。



©Natsuki Yasuda



その後は、子どもたちとバングラデシュのすごろくをして遊んだり、私と碧ちゃんのサイン会をしたり、女の子だけのダンス教室に参加させてもらったり、一緒にご飯を食べたりして、楽しい時間を過ごした。その時間のなかで、気付いたことがある。それは、退屈な時間が、一瞬もないということ。実はバングラデシュに来てからというもの、ホテルにいる時間以外は、スマホを金庫にしまっていて、持ち歩くことはなかった。日本にいる時の私は、常にスマホを片手に持っていて、暇さえあれば触っていたが、バングラデシュに来てからは、スマホがなくても暇をつぶせたと、というより暇と思う瞬間がほとんどなかった。なぜならバングラデシュの子どもや大人は、暇な時間(空き時間、移動時間)とされる時間に、オリジナルのゲームをして遊んだり、歌を歌ったり、「チャ」を囲みながら誰かと話したりしていたからだ。テレビやスマホ、ゲームがあまり普及していないなかで、自分達でいかにして暇な時間を過ごすかを考えて、実行する力は、本来あるべき「生きる力」なのではないかと学ばせてもらった。DICの話に戻ると、girlsの部屋でみんなと談笑しているときに、私が女の子の足に光るアンクレットを見つけたので、「そのアンクレット可愛いね。」と言ったら、その子が「足貸してみ。」と言って、私の足にアンクレットをつけてくれた。とっても素敵なアンクレットに見惚れていると、「あげる」と言われた。きっとこのアンクレット、大切なものなんだろうなって直感で思った。でもその子は、私にもらってもらいたそうな様子だったので、ありがたく頂いた。宝物になった。「物」よりも「私」とか、「私との出会い」そういうものを大切に思ってくれたのかなと思って、とてもあったかい気持ちになった。



本当はこの後、子どもたちが仕事をしているところ取材する予定だったのだけれど、私が体調を崩してしまい、叶わなかった…。が、取材しようと思っていた子に年齢と名前は聞いていた。14歳と言っていた。でも、どう見ても見た目は、9歳・10歳くらいだった。どうしてこんなことが起きるのだろうか、話を聞いてみると…

- \*そもそも自分がいつ生まれたのかを知らない。忘れている。
- \*食べないといけない時期にしっかりと食べられていない。
- \*あまり若い年齢を言うと雇ってもらえない。

このように言っていた。私は、自分の年齢(=誕生日)は、自分の名前と同じくらい大切なものだと考えているから、それが「分からない、忘れている、隠さないといけない」というのは、私だったら、どこか本当の自分を生きていないような気がして、悲しい気持ちになった。

それから、今日のDIC訪問を通して感じたことは2つ。

① 子どもたちは、全力で子どもだったこと。

② 子どもたちがたくましかったこと

DICで遊んでいる子どもたちは、全力で子どもだった。本気で遊ぶし、だからこそ喧嘩をする時もあった。でも、自分の身長と同じかそれより大きいくらいの椅子を運んで片付けている男の子がいたり、ご飯を食べ終わったら、どこか遊んでいた時とは違う表情で仕事に向かう子がいて、「本当に1人で生活しているんだな。」と思える瞬間がたくさんあった。それを見た時も、いつも誰かに頼



りっぱなし、やってもらいっぱなしの自分が、情けなくてしょうがなかった。今日も子どもたちに圧倒されることばかりだった。バングラデシュ滞在中も折り返し。気持ち新たに頑張るしかない。

### 〈5日目 バッタ事業〉

今日は、町工場が軒を連ねるバッタ地区取材した。ここではKnKが工場で働く子どもたちの労働環境の改善や、職業訓練が2019年まで行われていた。当時のプロジェクトに参加していたCommunity Watch Group(雇用主同士で地域を見守る活動や、問題点・改善点を話し合う活動)で工場オーナーの方々と、そこで働く若者たち取材した。



ここからは、インタビューした内容の一部を紹介していきたいと思う。  
まず環境改善事業に参加した、雇用主さんたちへのインタビュー。

#### —なぜこの事業を受けてみようと思いましたが？

A.KnKの事業が行っていた職業訓練を見に行ったり、話を聞いたりした時に、自分たちにとって、(事業に参加することは)プラスになることだと思ったため。  
(この事業に参加するということは、これまでの自分たちの当たり前を、ある意味壊すことにもなると考えたので、この質問をした。)

#### —参加して変化したことはありますか？

A.参加するまでは、労働環境や、ルールについて考えたこともなかったが、それを学ぶことができた。  
(バングラデシュでは、子どもだけでなく、やはり大人も学ぶ機会が少ないのだと、改めて考えさせられた回答だった。この変化は、彼らにとって大変重要だったと思う。)

#### —参加して良かったと思うことはなんですか？

A.従業員との接し方を学ぶことができたので、従業員と雇用主の距離が近くなった。

次は、KnKの環境改善事業に参加した子どもたちへのインタビュー。

—事業を通して自身の性格や、生活習慣で変わったところがありますか？

A. ライフスキルの授業や、教育の研修は印象に残っている。

—今現在で、改善してほしいところがありますか？

A. 大体のことは、雇用主と解決できるようになったが、仕事をする時の制服が欲しい。仕事に行き帰りする時の交通費も出ると良いな。

(このように改善して欲しいことを考えることも、環境改善事業が始まるまでは、少なかつたと思う。なぜなら、どんなに過酷な労働環境でも、それが昔から当たり前だったからだ。でも、こうして自分たちの働く環境が少しでも良くなるために何が必要かと考えられていることだけでも、素晴らしいことなのではないかと思った。

今回のインタビューを通して思ったのは、yes,no で答えられない質問をすることが、とても大切だということ。私が具体的な答えが欲しいと思って質問しても、yes か no かで答えられてしまう質問だと、具体的な答えは得られなかった。

良い回答は、長い質問から生まれることを痛感した。明日からは、なるべく yes,no で答えられない質問をするように心がけよう。

#### 〈6 日目 子供の仕事見学・DIC 訪問・SUF の学校見学〉

今日は、朝 5 時に起きて 6 時にはホテルを出て、いつも降ろしてもらっている DIC 側の岸とは反対側の岸に車を止めてもらい、子どもたちの仕事の様子を見学した。ターミナルに入ると、まだ寝ている人がいた。その人は、ターミナルの入口とターミナルを繋ぐ橋の上で寝ていた。莫蔭のようなものを敷いていたが、とても痛そうに見



えたとし、辺りは騒音で、こんな中で寝るなんてたまったもんじゃないと思ってしまった。そんなことを思いながらその人を見ていると、警察がやってきて、乱暴にその人を起こした。日本の警察とあまりにも違うその態度に腹がたった。ティプさんに話を聞くと、警察はお金を取る目的で、警察官が持っていた薬ををわざと人のポケットに入れて、「お前薬やってるだろ。」と言うことがあったり、突然暴力を振るったりするらしく、警察は、「子どもや大人を守ってくれる存在ではない。」という風に言っていた。日本の警察官のイメージとのギャップをものすごく感じた。

力を振るったりするらしく、警察は、「子どもや大人を守ってくれる存在ではない。」という風に言っていた。日本の警察官のイメージとのギャップをものすごく感じた。

ターミナルに入ると、DIC の子どもたちがいた。今日も同じ服だ。ボロボロの服で、裸足で、ターミナルを駆け回る子どもたちが、そこにはいた。子どもたちは主に、港に停泊した船に乗り込み、その船にある空のペットボトルを集めて、水で洗い、そこにまた水を入れて、今度はターミナルから出る船に乗る客に、それを売る仕事をしている。船が着いたらターミナルをダッシュして船のところまで行き、すぐにオーナーさんのもとへ空のペットボトルを持って行く。しっかり「仕事」をしていた。でも、そこで働いている子どもたちは、基本的に DIC に来ている子どもばかりだから、みんな遊びの延長みたいな感じで、仕事をこなしているようにも思えた。でも、それでも、「子どもが働いている」という事実は、時間がかかっても理解しがたいもので、ショックだったし、いつも和気あいあいと楽しそうに遊んでいる彼らの姿を見てきたからこそ、より一層そう思った。



子どもたちの仕事を見学して少し経ち、子どもたちを雇っているオーナーさんにインタビューをしようとしている時に事件が起きた。ターミナル(外)で撮影をしていたため、私達レポーターとオーナーさんだけでなく、子どもたちや、私たちが物珍しそうに見に来る人達で、大きな輪になってしまっていた。それを邪魔だと感じたのか、通行人が子どものうちの 1 人に「邪魔だ!」と怒号を上げた。子どもがそれに反抗すると、通行人はいきなり子どもにビンタをした。あまりに急なことに状況が全く飲み込めなかったのと、朝から「見るもの・聞くもの・感じるもの」全てに衝撃的なことが多すぎて、感情がぐちゃぐちゃになってしまって、自分の感情がなんなのかも分からなくて、泣いた。

バングラデシュに来て初めて泣いた。自分でもまさか泣くなんて思っていなかったし、17年生きてきた中で、自分が、自分の感情が分からなくなることなんて1度もなかったから、自分でも本当にびっくりした。私は泣いていたのに、ビンタされたその子は泣いていなかった。「なんだよ。」と言わんばかりの表情はしていたものの、泣かなかった。もう、暴力を受けることとか、暴言を吐かれることに慣れてしまっているらしい。実は、DICの子どもたちと初めて会った日(遠足の日)から、彼らの体のいろんな箇所に、どう考えても人為的につけられた傷があるのは分かっていた。見て見ぬふりをしていただけではないけれど、そんな辛い経験をしたとは考えられないほど、彼らは元気で、全力で今を生きることを楽しんでいたので、忘れてしまっていた。でも、この事件を私自身が目の前で目撃したことにより、彼らが置かれている環境は、子どもが、子どもらしく生きる事ができていない環境であることを、私が再確認することができた。DICはこのような暴力が行われたとき、すぐに子どもたちをDICに行くように誘導したり、暴力を振るった人に対して、話をしたりしている。その時も、センターのスタッフさんが、すぐに2人の間に入って、子どもにハグをして落ち着かせたり、暴力を振るった人に対して話をしたりしていた。センターのスタッフさんは24時間いつでも子どもたちの近くにいるわけではないし、DICもお休みの日があるので、いつでもどこでも子どもたちの安全を守ってやれるわけではないけれど、子どもたちにとって、何かあった時に守ってもらえる存在がいるというのは、とても心強いんじゃないかと思った。

ターミナルを出て、川を渡って反対側の岸にあるDICに行く為に、ボートに乗った。川は本当に汚くて、落ちたら感染症にかかることは確実だと思った。なのにも関わらず普通に川に入って泳いでいる人がいたり、体を洗っている人がいて、驚愕だった。



©Natsuki Yasuda

ボートのおじいちゃんにお礼を言ってDICに入ると、まだ子どもたちは仕事をしている時間だったので、いつもより子どもは少なかった。徐々に子どもが増えてきて、girls部屋で女の子たちと話していると、この日2つ目の事件が発生した。girls部屋に入ってきた子のうちの1人の子の、顔の一部がえぐれていて、血が出ていた。喧嘩をしたらしい。スタッフさんが応急処置をするために部屋に入ってくると、消毒が怖かったのか、病院に連れて行かれるかもしれないと思って不安だったのか、泣き出してしまった。それでも放っておく訳にはいけないので、応急処置をすることになった。

私が近くで見守っていると、女の子がギュッと私の手を握ってきて、怯えながら目をつぶった。その時、私とその女の子は生まれた国も、環境も、これまで経験してきたことも、全くと言って良いほど違うけれど、痛いものが怖いとか、誰かが近くにいたり、誰かの手を握ると安心するという、物事に対する感じ方は同じなんだなと思った。実は同じ体験を日本でもしたことがあった。私の双子の兄は、発達障がいを持っていて、中学校まで同じ学校に通ってはいたものの兄は特別支援級のクラスで学習をしていた。そのため私と兄は同じ年齢だけど、学ぶ内容も教科も全然違っていった。でも、同じ時に同じことで怒ったり、悲しんだり、喜んだりする。この経験によって、ハンデがあろうとなかろうと、物事に対する感じ方は同じであることを学ぶことができたけれど、今回のこの事件があったことで、日本で生まれようが、バングラデシュで生まれようが、物事に対する感じ方は同じ部分があるということに、新たに気付くことができた。1つ目の事件で、子どもは暴力を振るわれることや、暴言を吐かれることに慣れていていると書いたが、慣れていているからといって、悲しくないわけじゃないし、辛くないわけじゃないということ、この2つ目の事件から確認することができた。この日は、このあともたくさん予定が入っていたので、いつもより早くDICをあとにしようとしていたら、ある男の子が、「これあげる。」と言って日本のヤンヤンつけぼーのようなスナック菓子をくれた。「どうしてくれるの?」と聞くと、「この前遠足楽しかったからそのお礼!」と言ってくれた。みなさんは彼らの1日の稼ぎがどれくら



いかに知っているだろうか。どんなに一生懸命働いても、スナック菓子を何袋か買えるくらいしか稼げないのだ。その中のお金を使って、私にプレゼントしてくれた。これまで誰かにお菓子をもらった時、「お菓子をもらえたこと」に対して喜びを感じていたけれど、初めて、「お菓子を私にあげようと思ってくれた気持ち」に喜びを感じた。

いろいろな事がありすぎて、もう1日が終わっても良さそうだがこのあとティプさんのお家にお邪魔して、ご飯を御馳走になって、念願のヘナタトゥーもしてもらった。とても親切に接してくれたティプさんの奥さんと娘さんにお礼をして別れたあと、ティプさんの家から歩いてすぐの、ティプさんが運営しているSUFの学校に行った。そこではスラム街に住む子どもや、様々な家庭の事情を抱える子どもたちが集まっていた。黒板に向かって授業をしているクラスもあれば、職業訓練を受けているクラス、



その中の女の子のクラスが私達レポーターの為に、ダンスと歌を披露してくれた。なぜかそれを見ている時に、「明日日本に帰るんだな。帰りたくないなあ。」という思いが込み上げてきて、泣いてしまった。そんな私の手を、1人の女の子が取ってきて、みんなの輪に入って踊った。本当に本当に楽しかった。彼らと一体化している(できている)ように思えて、これも宝物になった。



私はこれまで国が運営している学校にしか行ったことがないので、SUF という国ではない団体が運営している、また様々な事情を抱える生徒が集まる学校を自分の目で見ることはできたのは、新鮮だったし、自分の中でとても意味のある経験となった。

早朝からの活動に、疲れ切って車に乗り込むと、車内で碧ちゃんが三喜さんにこんな質問をした。「DIC の子どもたちが SUF の学校に行くことはできないんですか?」と。三喜さんは、「もちろんそれを検討したことはあったけど、DIC に来る子は、自分自身で選択（仕方なく働かないといけなくなった子や、ストリートチルドレンになるしか選択肢がなかった子もいると思うが…。）して、シヨドルガットに来て働いているので、その意思是尊重しなければいけないし、学校に嫌な思い出があったり、そもそも学校に行ったことがなくて新しい場所に行くことに嫌悪感を覚える子もいるので、彼らを学校に通わせることには慎重になっているよ。でも、DIC で文字の勉強や、自分たちの権利の勉強、健康・保健の勉強をすることで、それを補っているよ。」とっていた。はっとした。初めにも書いたように、この旅に来るまで私は「学校」に行けない子どもたちが「学校」に行ける制度をつくりたいと思っていた。教育を受けることができる機会があるのは学校だと決めつけていたから、そのように考えていた。しかし、バングラデシュで、学校とは違う場所で、違う形で行う教育を目にして、教育を受けることができる機会があるのは学校だけではないという事を知った。このことから、私が本当にやりたかったことは、「学校に行けない子どもたちが学校に行ける制度を作る」ことではなくて、「すべての教育を受けられていない子どもたちが、そ

れぞれにあった形で教育を受けることができるような制度を作る」ことなのかもしれないと 気づいた。

### 〈7 日目最終日〉

今日はバングラデシュ滞在最後の日。はじめの 3 日間くらいは現地の生活に慣れることに必死だったけれど、それからはバングラデシュにいることや、レポーターとして様々なところに行って、様々な人と出会えることに喜びを感じていた。だから本当に日本に帰らないといけないのが悲しくて、朝から少ししんみりしながら、午前中にはホテルを出て、最後の DIC へと向かった。いつもみたいに子どもたちとおしゃべりして、遊んで…。でも、いつも通りのはずなのにどこかいつもの彼らと違う気がして、まだ何も言っていないけれど今日が最後だというのを彼らが悟っているように感じた。最後に、日本から持って来た T シャツをみんなに配って集合写真を撮って、全員に見届けられながらお別れをした。子どもたちという時は大丈夫だったけれど DIC を出た途端に“最後”を実感し、涙が出た。



碧ちゃんと「このままここにしようか。」なんて話しながら、お昼ご飯を食べるのとお土産を買うのを済ませる為に、バン格拉デシュで一番大きなショッピングモールのうちの1つに行った。ショッピングモールは、さっきまで私達がいたショドルガットとは対極の世界で圧倒されてしまった。フードコートで私達が昼食を食べているすぐ近くで、子どもを連れた家族が食事をしていた。その子どもは、きらきらのドレスを着ていた。きれいな靴を履いていた。ピザを食べていた。その子の目には光がなかった。

その子がお母さんに手を引かれてショッピングモールに来て、食事をしているのと同じ時刻に、少し場所を移動すると、一人で、黙々と仕事をし、スナック菓子を頬張る子どもたちがいた。そもそも生まれた環境が違うし、比べるものではないことも分かっているつもりだけれど、すごく腹がたった。なぜこんなにも理不尽な世界なんだろうと思ってしまった。あまりにも短時間のうちに、あまりにも正反対な子どもの姿を目撃してしまったことで、頭が混乱して、また自分で感情が整理できなくなってしまった。

モヤモヤした気持ちのままショッピングモールを出て、近くのスーパーに行った。そこで local のお菓子や食べ物をお土産として買ったのだが、なににしようかと悩んでいる時に、1人の男の子が目にとまった。なぜ目にとまったかということ、1本のファンタオレンジをとっても嬉しそうに持って、「見て!」と言わんばかりにキラキラの瞳をこちらに向けてきたからだ。たった1本のファンタだ。しかも500mlなんかじゃない、350mlのファンタだ。私だったらなにも考えずに買って、ちゃんと味わうこともなく飲み干してしまうけれど、彼にとってはこの1本がとても貴重で、やっと手に入れたお宝なのかもしれないなと思った。やっぱりここでもショッピングモールにいた子の事を思い浮かべてしまって、「なんでなにも悪い事をしていない子どもが、自分の生まれた環境のせいで人生を変えられてしまうんだろう。」と思って涙が出た。その子のファンタを持つ表情が忘れられなくて、涙が止まらなかった。現実を受け入れられなかったし、受け入れたくもなかったけど、会計を済ませてスーパーを出た。駐車場で車を待っている時に、さっきの男の子に再会することができた。話を聞くと、お母さんと2人でシールを売る仕事をしているらしく、さっきはシールが売れたからそのお金でファンタを買った、とのこと。まだ手にシールを持っていたので、それを私達が買ったら、そのお金をポケットに入れて、また嬉しそうにスーパーに入ってしまった。シールの値段は少し高かったけれど、彼と出会えたことは、シールの値段以上の価値があったと思う。

ホテルに戻り、すぐに身支度を済ませて、ホテルの人(この滞在中でホテルの方と、とっても仲良くなった)とお別れをし、空港までの車に乗った。結局始めから最後まで渋滞がない道路はなかったけれど、ホテルから空港までの車に乗っている時間は、私の「ま

だ帰りたくない。」という思いに反して、とても短く感じた。ティプさんに見送られながら空港に入って、23:55の飛行機でダッカを出た。

### ○帰国してからの心境の変化 「世界中の子どもが幸せになればいいな」

街中を歩いている、有名人みたいに周りの人に注目されることもなければ、車に乗ってもほとんど音のしない道路に、日本に帰って来たことを実感したし、「なんか冷たいなあ。」という風に思ったのが、正直な帰国してすぐの感想です。

帰国してからは、神奈川県にある祖母の家で過ごしていました。祖母の家にいる間に、私達に会いに、いとこが遊びに来てくれた事がありました。いとこには1歳になる娘がいたので、一緒にご飯を食べたり、絵本を読んであげたりしました。ここでもまた、バングラデシュの子どもたちを思い出しました。でも、自分の中で時間をかけて整理できたからか、前のように腹がたつようなことはありませんでした。あのときショッピングモールにいたあの子ども、スラム街で会った子ども、DICの子ども、SUFに通っている子ども、今バッドで働いている青年たちも、日本で生きている子どもたちも、すべての子どもたちが幸せになれば良いなって、その時ふと思ったのです。

### ○日本の皆さんに伝えたいこと 「気付く力」「違和感を覚える感覚」

一週間に及ぶ旅を経験して、日本の当たり前は本当に通用しないことを知りました。当たり前は国によって全く違うことに気付くとともに、日本とは違う当たり前を経験した事で、完全な主観ではありますが、日本の当たりの良いところ、悪いところに気付いたし、逆にバングラデシュの当たりの良いところと悪いところにも気付きました。

大切なのは、このように「気付く力」それから「違和感を覚える感覚」だと思います。私たち日本人からしたらありえないような車の乗り方や道路の汚さは、バングラデシュの現地の方にとっては当たり前なのです。日常生活の中で今の当たりに気付くことや、さらにその当たりに違和感を覚えることはなおさら難しいことだけれど、それに気付くことができれば、自分の国を自分たちの力でもっと良くすることができたり、違う国や環境に行ったときに、その国や環境をより良くする当たり前を創り出すことができるかもしれません。

世界中が良い当たり前を同じように作っていったらその国の文化がなくなるなんていう人もいるかもしれませんが、悪い当たり前を文化なんていう便利な言葉で片付けるから、いつまでも変わらない状況が世界中のあちこちにあるんです。(善悪の基準は人によって違うし、外野からは理解できないような当たり前を文化として大切にしているところもあると思いますが…。)

「発展途上国のために」と聞くと、どこか現実味がなくて、自分なんかにはできることなんてないんじゃないかと思いがちだし、私もこの旅に出るまでずっとそうでした。

けれど、自分の身近なところでもしっかりとやれることはあると、気付きました。ぜひこれを読んでくださった皆さんにも、「気付く力」と「違和感を覚える感覚」を、日常生活の中で少しでも意識していただければ、と思います。

### 〇私のこれからについて 「一生涯をかけて」

私はこの1週間のバングラデシュの旅の中で、自分の意見が変わる瞬間や、自分の価値観すらも変わってしまうような瞬間がたくさんありました。そういう瞬間に巡り合える機会をもらえたことを、本当に感謝しています。でもこの1週間は私の中のスタート台にすぎなくて、これからは旅を通して得た経験や思いを色々な人に伝えたり、私の中のバネにして、たくさんの活動につなげていきたいと考えています。色々な人に伝えると書きましたが、まずは私が小学4年生のときに発展途上国のことを初めて知って、日本とは違う世界を知って、大きな衝撃を得た経験から、日本各地の小学校をまわり、バングラデシュで私が見て、聞いて、感じたことについて伝えていけたらと思っています。その方法として、小学生にも伝わりやすいようにオリジナルの絵本を製作し、それを持って日本中を飛び回ろうと考えています。私のように、発展途上国に興味をもってもらいたいとかそういうわけじゃなくて、今見ている景色や当たり前は日本だけのものであって、世界を見てみるともっといろいろな景色があって、当たり前があるんだよ。というようなニュアンスで伝えていけたらと思います。そして、「すべての教育を受けられていない子どもたちが、それぞれにあった形で教育を受けることができるような制度とは」、「世界中の子どもたちが幸せに暮らすためには」この疑問を常に心に留めながら、これから一生涯をかけて活動していきたいと思っています。

第34回 友情のレポーター（2024） 松元 夏和